

緊急対策のお手本

名君 保科正之②

一龍斎貞花
講談師

家光が亡くなり、家綱が四代将軍に就任するや、正之は後見人として

「徳川幕府が四代で崩壊するようなことがあってはならん。家綱公は11歳のご若年、なんとでもお支えしなければいけない。今後わしは、死ぬ迄会津には戻らぬ。会津のことは田中正玄^{はる}、江戸のことは保科民部にまかせる。わしは上様の後見人に徹するのでよろしく頼む。領民の不満がない政^{まつりごと}を行えば一揆は起きない。領民が満足する政をしてくれよ」

かくして正之は、死ぬ寸前まで22年間1度も会津に戻らず、若年の家綱を支え続け、民のための政を行って行くのでございます。

家綱政権三大美事

三河刈谷藩主松平定知が、幕府を批判する意見書の提出。もっと大事件だったのが由井正雪の乱。浪人問題は、浪人を

厳しく取締ったり処罰するだけでなく、どうしたら浪人の発生を防ぐことができるか、一揆が起きないようにするにはどうするか。今と同じ就職難からきていることです。大名の中にも不穏な動きをする者もいる。そこで末期養子の禁止を緩和する。殿様が病気になって亡くなる前に養子を申請し、認められれば存続する。家は安泰で武士は浪人しないですむわけで、会社の倒産防止と同じ。これまでは死ぬ寸前の届け出はほとんど認められず取りつぶしだった。

その後の、殉死の禁止、大名人質制度の廃止（大名の重臣や妻子を人質として江戸に置くことの廃止、しかしその後謀反を心配して出女の禁止を再行）と並んで家綱政権三大美事、素晴らしい政策と称えられました。

玉川上水開削の決断

家康入城以来江戸の町は大きくなり、参勤交代で武士の数が、市民の半数をメめ、井の頭から水をひき神田上水を造ったものの、人口がふえる一方で水が足りない。町奉行神尾豊前守は、水の元を求め玉川庄右衛門、清右衛門兄弟に調査させていた、実施調査も行われていたが、いざ実行という時になって、玉川上水を引いたなら、その川筋の道を攻め昇られたら一大事。道が開かれ便利になれば侵入される恐れがあるという。

「江戸の人々は水が乏しく苦しんでい

る。玉川の水を引いて用水にし、されば万民安堵し江戸の町は安泰となります。上水の左右に新田を開けば40余りの村を作ることが可能、農作物も豊になります」老中達が謀反などを心配するのに対し、正之はあくまでも民のための政を^{まつりごと}考えて、玉川上水開削の決断を下した。

明暦の大火、緊急災害対策

「火事だ、火事だ！」明暦3年1月18日江戸市中の大半を焼き尽くした振袖火事、火の手が本丸へ迫った。

「上様にもしものことがあっては一大事、ただちに上野の寛永寺へお移り頂こう」「それはよろしくない、焼け跡を横断するのは危険、それにトッパが本城から出ることは、かえって市民を不安におとし入れることにもなりかねません、トッパは本拠にあって泰然とすることが大切、西の丸にお移り頂くことが一番です」正之の言葉に家綱は西の丸へ避難。3日2晩燃え続け焼死者10万余人。江戸開府以来の大火災。火事が納まるや急に気温が下がり大雪、家は焼け、餓死、凍死する者もありという惨状。

「緊急の救済として浅草の米蔵から1日千俵出し、市民への炊き出しを」

「そんなに出したら米蔵は空になる」

「イザのために備えてある米蔵、今出さずしていつ出すのでござる」こうして1日千俵の米を出し粥の炊き出し。

しかし米不足から米の価格は上がる一

方、市民が困るばかりか、米騒動が起きるようなことがあってはならん。これには江戸の人口を一時的にへらすことだと、

「参勤交代で江戸在勤の大名を帰国させれば家来も同行し、江戸の人口をへらし、それによって米の需要をへらし、価格の安定にもつながります」これは前代未聞のことで、ただちに23大名にすぐに帰国通知、そして4月出府予定の22大名に6月まで遅らせるよう指示。この結果米の値段が下がって市民を安堵させた。「これだけではまだ足りぬ。家を焼かれた者に救助金。旗本、御家人には作事料を与えよう。町家の間口1間につき3両1分として、合計16万両」

「16万両、それでは幕府の金蔵が空になる。本丸と天守閣を再建しなければなりませんぞ」「幕府の蔵に貯えあるのは、このような大事の時に民を救うためのものではござらぬか、今こそ使うべきでござる。西の丸で政務は務めます、戦のない今、天守閣は不要、まず民の暮らしが大事でござる」まず焼け出された者を救うことが大切と、民のことを考える正之の強い説得に老中達もやっと納得。

16万両の救援金が江戸市中に放出され、町民を安堵させ早い復興につながっていったのでございます。

会議、会議で議論するより、1日も早く復興を実行することである。